

2025年9月14日 藤沢北教会 主日礼拝説教

説 教：「律法を完成する方」

聖 書：レビ記第18章5節

マタイによる福音書第5章17節～20節 (7頁)

讃美歌：458 (信仰こそ旅路を)

### 【レビ記第18章5節】

18:5 わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる。わたしは主である。

### 【マタイによる福音書第5章17節～20節】

#### ◆律法について

5:17 「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と 思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。

5:18 はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消え うせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。

5:19 だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうする ようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。 しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大きい なる者と呼ばれる。

5:20 言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ 派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天 の国に入ることができない。」

### 【説教】

・ガリラヤの丘の上に座っている主イエスの周りには、弟子たち が取り囲んでいます。

・そして、その主イエスの話された御言葉を弟子たちは聞いてい ます。

・そして、今、私たちも その主の言葉を聞くためにここに集まり、 座っています。

・それは、その御言葉によって 主のみ旨を知り、私たちが、相応 しい生き方が出来るようにと、主の言葉を聞こうとして座って います。

・私たちが、どう生きるべきなのか 知るために、主の言葉を聞 く。

・その意味で、私たちもまた 主の弟子たちであると言えます。

・当時のユダヤの人たちは、聖書、これは今の私たちからいたし ますと旧約聖書のことでありますけれども、この聖書を神の 言葉として聞いたのです。

・それは、神の義に生きるために聖書の言葉を聞いたのでした。

・彼らは、善く生きるために、神のみ心を、聖書の中に探し求め、 そして、それが朗

読されるのを喜んで聞いたのであります。

- ・主の言葉を聞いて生きる。
- ・生きるために主の言葉を聞く。

・それが彼らにとりまして、この世を生きると言うこと、生活そのものでありました。

・先ほど読んでいただきましたけれども、旧約聖書のレビ記の 18章5節にこうあります。

- ・「18:5 わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる。わたしは主である。」とこう記されています。
- ・つまり、律法を聞いて行いなさい。
- ・そうすれば、あなたは生きるだろうと言うことです。

・神の言葉を聞いて行う、それは、あなたに命を与える。それによってあなたは生きるだろうということを言っています。

・律法というのは、創造者なる神のみ心が、私たちにも分かる言葉で書かれているものなので、それを聞いて歩むならば、人は、本当に生きることになる。

・神さまのお作りになった本来のあり方を取りもどして、神の前で、隣人と共に、善く生きることが出来るということ。

・そのことが、ユダヤの人々にとりまして、律法の持つ意味でありました。

・ところが、こうした人たちに、とりまして、主イエスという方は、どうにも、自分たちの物差し、尺度に合わない人物として写ったようであります。

・それは、主イエスは、どうも律法をあまり重んじない人というように写りました。

・例えば十戒の中に、安息日を心に留めこれを聖別せよとあります。

・ですから、安息日になりますと、ユダヤの人たちは一切労働することを慎みました。

・病気の人に対する医療行為でさえ、労働の一種になると考えたので、厳格な人たちはそれを差し控えました。

・ところが、主イエスは安息日に、片手の萎えた人の病気を癒やされました。

・これは律法違反ではないか。

・人々が大騒ぎをしました。

・その中で主は、騒いでいる人たちに対して、一匹の羊が穴に落ちた時、その日がたまたま安息日だからと言って手で引き上げてやらない人がいるだろうか。

・まして、人間は羊よりもはるかに大切なのだ。

・安息日によいことをすることは、赦されているのだと、そうお答えになったのであります。

- ・律法学者やファリサイ派の人々に取りまして、これは許しがたい行為でありました。
- ・イエスは律法を平気で無視している。軽視している。
- ・こういう噂が、すぐさま広がりました。
- ・ファリサイ派の人々は、まさにこの律法の無視と言うことをもって、イエスを訴える口実にしようと企んでいました。

- ・これが、人々に与えた、主イエスの印象です。
- ・一体、この方は、自分たちが生きる糧として大事にしてきている律法をどう思っているのだろうか。
- ・そういう思いを聞いている人々は持っています。
- ・そのような中、集まって来ました人々を前にして、主イエスは口を開きます。
- ・「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」

- ・「律法や預言者」という言葉は、旧約聖書を指しています。
- ・従って主イエスは、ここで自分は、旧約聖書、当時の人たちにとっては聖書そのものでしたけれども、それを廃止するために 来たのではない。
- ・特に律法というふうにありますので、律法を無効にするために、来たのではない、むしろこれを完成し成就するために来たのだと言われたのです。

- ・そうして このように言われました。
- ・「はっきり言っておく。全てのことが実現し天地が消え失せるまで律法の文字から、一点一画も消え去ることはない。」

- ・全てのことが実現し天地が消え失せるまで、律法の文字から、一点一画も消え去ることはない。
- ・自分はこれを廃止するために来たのではない。
- ・むしろことを完成するために来たのだと言われたのです。

- ・主イエスは、さらにその先きを語られます。
- ・「言っておくが、あなたがたの義が、律法学者やファリサイ派の人々の義に勝てなければ、あなたがたは決して天の国に入ることは出来ない。」

- ・律法学者、ファリサイ派の人々の義。
- ・それは、律法を型どおりに守るという義であります。
- ・彼らは、律法に定めたらた通りに行動し、そのことを通して、自分が正しい人間であ

ると言うことを人々の前に示し、そして、神の前に示して、見せびらかせたのであります。

・そもそも「義」とは、神が人間にお求めになる相応しい生き方を言います。  
・ですから、仮に心ではそう思っていなくても、とにかく律法に書かれているのだから、形だけを守るという仕方です。そのように行うのであれば、それが神がお求めになっている相応しいことだと言えるでしょうか。

・主イエスが、弟子たちに求めたのは、そのような律法学者、  
ファリサイ派の人々の義に勝(まさ)る義であります。  
・心はなくても形だけ整えればよいというのではなくして、  
心から、喜んでそれをする、義であります。  
・心から喜んで それをするようになる義です。  
・律法は、神のみ心であり、神の意志です。  
・そして その本来の意図は、先程 最初に触れたように、義に生きるため、私たちが  
良く生きるためです。  
・人が神の前に、人と共に、愛を持って善く生きるようになるために、与えられている  
ものです。

・従ってそれは、心なくして、形ばかり整えるというようなことでは、これは満たされる  
ものではありません。

・ご承知のように主イエスは、数々の 律法を その全体を二つの愛の戒めに要約され  
ました。  
・心から神を愛すること。  
・そして、隣人を自分のように、我がことのように愛することです。  
・自分を愛してくださる神を覚えることがなければ、そして、それ故、この神の前に、自  
我が打ち砕かれることが無ければ、人は、なかなか優しい気持ちにはなれません。  
・神が 自分が与えておられる隣人と共に生きることを選び取ることも出来ません。  
・二つの愛の戒めは、相互に関連し合っています。

・十戒の二つの板もそうです。  
・第一の板と第2の板は、切り離し得ないほど密接に結びついています。  
・まさに この愛の戒めこそ、律法の成就であり、完成です。  
・このキリストの教えが、初代の教会のキリスト者の生活にとってどんなに大きな意味  
を持ったか。  
・その一つの証拠が、使徒パウロの伝える言葉の中にあります。

- ・ガラテヤの信徒への手紙6章2節を読みますとこう出てまいります。
- ・350頁にありますけれども、
- ・「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。」
- ・互いに重荷を担い合うと言うこと、これが、キリストの律法を全うすることになる、満たすことになるというのであります。
- ・ここで言われていることは、互いに、互いの重荷を担い合いなさいと言うことです。
- ・担い合うのであって、一方だけが重荷を負っているではありません。
- ・そして、人間は誰もが重荷を持っています。
- ・お互いに、重荷を持っています。
- ・時には、残念なことでありますけれども、悲しいことでありますけれども、お互いが相手を重荷になってしまう場合すらあります。
- ・そこで、互いに重荷を担うと言うことが、すなわち愛のわざになります。
- ・重荷を押しつけ合うのではなく、一方にそれを押しつけるのではなく、両方のものが互いに自分から先に歩み寄って、相手の重荷を担(にな)おうとする。これが聖書の示している愛のわざであります。
- ・そして、この愛のわざを行うことが、律法を全うするのです。
- ・けれども、私どもはつぶやくのではないのでしょうか。
- ・「確かにそう言われればそうだ。その通りですけれども、それもわたしには出来ません。」
- ・そうつぶやく場合には 私たちは、大事なものを見失っています。
- ・ファリサイ派の義にまさる義、それは何よりも、主イエス・キリストご自身であるということです。
- ・イエス・キリストという方、主イエスという、お方の存在そのものが、ファリサイ派の義にまさる義なのです。
- ・まさに、そこに真の愛があるからです。
- ・逆に言えばファリサイ派の義にまさる義は、イエス・キリストという方によって到来したのです。
- ・今朝、わたしたちは、何を聞いたのでしょうか。
- ・マタイによる福音書第5章17節「わたしが来た」という言葉です。
- ・わたしが来たのは、律法を完成させるためである。
- ・わたしは来た、わたしたちは、この言葉を聞いたのです。
- ・律法を完成するためにわたしは来た。
- ・他者の重荷を担うために 神が来られ、そして、このわたしが、この世を生きていく時の重荷を背負ってくださっているのです。

・わたしの重荷、わたしの いやな性格、わたしの弱点、そして、わたしの罪の重荷を、神が背負ってくださっているから、

このわたしは、恵みの中を生きることが出来る。

・そして、善く生きることが赦されているのです。

・では、そこから、どのような結論が引き出されるでしょうか。

・主イエスが来てくださり、ファリサイ派の義にまさる義になってくださった、だから、もうわたしには、律法は関係ないという結論を引き出すのでしょうか。

・愛の業もしなくてよいと 言うことになるのでしょうか。

・主イエスは、そうは見えておられません。

・主は弟子たちに そのようなことを期待しているのでは ありません。

・主ご自身が、真(まこと)の地の塩、世の光なのですけれども、この主の光に照らされた者たち、主の御言葉を聞いている者たちも、世の光になるようにと、弟子たちを、そして私たちを招いておられます。

・私たちは、ともし火を灯す 灯芯(とうしん)です。

・そして、私たちの心に 主によって一度灯されたともし火は、

たとえそれが湿った灯芯に灯された灯火(ともしび)であっても、私たちの中で燃え続けており、それを升の下に隠すのではなく、足下を照らすためにそれを用いるべきなのです。

・用いることが 恵みなのです。

・愛の業に生きることが、恵みなのです。

・そうすると、先程とは別の結論が引き出されてくるでしょう。

・キリストが来てくださり、ファリサイ派の義にまさる義になってくださったのだ、だから、私たちも、この業を行うのです。

・私たちは この方の体、キリストの体とされたのですから、私たちは、この方の中にいるのであり、この方の手足となっているのだということです。

・私たちが、キリストの体なのです。

・手も、足も、あります。

・目も耳もあります。

・それぞれが違います。

・個性も違う、性格も違う、でも、それも主の体の一部として主が用いておられる。

・役割の分担も違います。

・しかし、私たちの使命は一つです。

- ・それは、キリストの手足となって、キリストの愛の業を行うということです。
- ・キリストがファリサイ派の義にまさる義となって、ある人の重荷を担おうとされているのであれば、その手足であるこの私は、そのために遣わされているのです。

- ・けれども私たちは、無理をしなくてもよいのです。
- ・自然体でよいのです。
- ・しかし、私たちの自然体とは、キリストの体の自然体です。
- ・そのことだけを自覚して、キリストによって用いられるままに、自然体で振る舞えば良いのです。

- ・そして、キリストの指令を受けたなら、この私の生きる上での重荷、わたしのいやな性格、わたしの罪を背負ってくださっているキリストの愛の故に、その愛を届ける者になりたいと思います。
- ・私たちが愛の業をなすとするれば、その愛は私たちのものではなく、キリストのものです。
- ・キリストの愛を届ける者になりたいと思います。